

日本における漢詩の注釈・翻訳：「訓読」のちから、白居易「李夫人」を題材として（パネルディスカッション「ことばの翻訳・文化の翻訳」）

著者	谷口 孝介
雑誌名	日本語と日本文学
巻	61・62
ページ	1-10
発行年	2017-03-31
URL	http://doi.org/10.15068/00146124

【パネルディスカッション】 ことばの翻訳・文化の翻訳

翻訳は一義的には異言語間に生起する現象であるが、言語間の転移にさいしては言うまでもなく背景に文化の問題が横たわる。あることばは異言語のことばと一対一対応しているわけではなく、総体としての文化という地における関係性のなかで対応する。そのような問題意識のもと、日本古代文学における中国語と日本語、日本近代文学における古語と近代語、国語教材における翻訳教材の三つの話題を提供する。谷口は日本での中国語の受容という特殊状況において訓読が果たす役割について、馬場氏は『源氏物語』の二種の与謝野晶子訳を比較しつつ現代語訳という行為に浸透する近代思维について、阿部氏は小学校国語の翻訳教材に民話が多く採用されており、しかも表現の特徴を指導することになっていく逆説的状况を指摘する。三者それぞれのアプローチで、翻訳という鍵語を通してことばと文化とのあわいを測定しようとするものである。(谷口)

日本における漢詩の注釈・翻訳

—「訓読」のちから、白居易「李夫人」を題材として—

谷 口 孝 介

はじめに

日本人は、自身にとって外国語である中国語で記された典籍を、すべてを日本語に置き換えて享受するのではなく、訓読という独自のシステムでもって、中国語の字面はそのままにして意味を取るといふ読書の方を案出した。日本における訓読がまったくの独創でないことはすでに言われているが、現代に至

るまでこの読解システムでもって外国語文献である漢籍を、比較的自由によむことができる事実は、やはり驚くべきことと言わなくてはならない。中国語をすべて日本語に置き換えてしまふのではなく、シニフィアンとしての中国語の姿を留めつつ、日本語として享受すると言ふユニークなあり方なのである。

ことは中国における外国文献の享受の様相と対比すると明確

である。たとえば三藏法師玄奘がインドへの取經の旅を終え、唐朝に仏教經典五百二十夾六百五十七部を將來したと言う。ことを記した『大唐大慈恩寺三藏法師伝』ではこれがファイナーレとなるわけではなく、皇帝太宗の後援のもと、大翻訳事業が遂行され七十五部千三百三十五卷の仏典が中国語に翻訳されたことをもって、彼の偉業とするのである。褚遂良書で高名な太宗のいわゆる「聖教序」ももっぱら訳經事業を顕彰したものである。いっぽう日本のばあいは、空海をはじめとする入唐八家たちの詳細な「請求目錄」が具わるが、そこには日本語訳への指向は見出せない。今日に至るまで基本的に仏典は日本語に翻訳されずに中国語訳のまま読誦され続けている。仏典ばかりではなく漢籍將來においても同断であって、漢籍を日本語へ置き換える発想はことに古代においては見られない。

このような訓読システムの特徴について、『白氏文集』新樂府五十首の一首「李夫人」(四一〇)を取りあげて、中国における注釈と日本の注釈との方法の差異に注目して考えてみる。日本での漢籍の注釈において助字に注目することが多いのは、日本人が中国語を理解するにあたって、訓読という逐次訳システムを通して行っているからではないかとの見通しを述べることとする。

一、「李夫人」の本文

まず本論で取りあげる「李夫人」全詩を掲げる。本文は日本に残存する『白氏文集』旧抄本のなかでも最古で良質の本文を保持すると考えられる神田本に拠り作成する。訓読も神田本の

訓点を最大限、利用して作成した。とくに読点の付し方は訓点本独自のものではあるが、日本語の呼吸を伝えるものと考え、採用してみた。また行論のつごうから各句頭に句番号を付した。

李夫人(鑿壁惑也。)

1 漢武帝、

2 初喪李夫人

3 夫人病時不肯別

4 死後留得生前恩

5 君恩未念念未已

6 甘泉殿裏令写真

7 丹青画出竟何益

8 不言不笑愁殺君

9 又令方士合靈藥

10 玉釜煎鍊金爐焚

11 九華帳深夜悄悄

12 反魂香反夫人魂

13 夫人之魂在何許

14 香煙引到焚香處

15 既來何苦不須臾

16 縹渺悠揚還滅去

17 去何速兮來何遲

漢の武帝、

初めて李夫人を喪えり。

夫人の病せし時に別れ肯んぜず、

死して後に生前の恩を留め得たり。

君の恩、尽きざれば、念、已まず、

甘泉殿の裏に真を写さしむ、

丹青、画し出でたり、竟に何の益

かあらむ。

言わず、笑わず、君を愁え殺す。

又方士をして靈藥を合わせしむ、

玉釜に煎鍊して金爐に焚く。

九華の帳、深くして夜悄悄たり、

反魂の香は夫人の魂を反す。

夫人の魂、何の許にか在る、

香の煙、引きて香を焚く処に到る。

既に来て何ぞ、苦しく須臾あらざることを、

縹渺、悠揚として還えつて滅え去る。

去ること何ぞ速く来ること何ぞ遅

る。

去ること何ぞ速く来ること何ぞ遅

- 33 生亦惑死亦惑
- 32 此恨長在無銷期
- 31 縱令妍姿艷骨化為土
- 30 馬嵬路上念楊妃
- 29 又不見秦陵一掬淚
- 28 重璧台前傷盛姬
- 27 君不見穆王三日哭
- 26 自古及今多若斯
- 25 傷心不独武皇帝
- 24 安用暫來遙見為
- 23 背燈隔帳不得語
- 22 魂之來兮君亦悲
- 21 魂之不來兮君心苦
- 20 不似昭陽寢病時
- 19 翠娥髣髴平生貌
- 18 是耶非耶兩不知

き、
 是か非か、兩ながら知らず。
 翠娥髣髴たれども平生の貌に、
 似ず、昭陽に病に寝せし時に。
 魂の来らざるときには君の心苦し
 ぶ、
 魂の来るときにも君亦た悲しぶ。
 燈を背け、帳を隔てて語すること
 得ず、
 安くんぞ、暫く来て遙かに見るこ
 とを用て為む。
 心を傷ましむることは、独り、武
 皇帝のみにあらず、
 古より今に及ぶまでに、多く、斯
 くのごとし。
 君、見ずや、穆王の三日の哭を、
 重璧台の前に、盛姬を傷む。
 又た、秦陵の一掬の涙を見ずや、
 馬嵬の路の上に、楊妃を念えり。
 縱令、妍姿、艷骨をもて、化して
 土と為るとも、
 此の恨は長く、在りて銷ゆる期な
 けむ。
 生きても亦た、惑わし、死しても
 亦た惑わす、

34 尤物感人忘不得
 尤^{トク}けき物の、人を感じしむること、忘るること得ず。

35 人非木石皆有情
 人、木石にあらざれば、皆、情あり、
 如かず、傾城の色に遇わざらむには。

36 不如不遇傾城色

二、中国における注釈について
 白居易の中国における研究の歴史は、他の著名な詩人に比して浅いものである。『白氏文集』全体が散文作品も含めた形で、はじめて活字で読めるようになったのは、顧学頤氏校点『白居易集』四冊（中華書局、一九七九年）によってである。本書は中国古典文学基本叢書の一冊として刊行されたもので、それまで景印本文でしか全体を読むことができなかった『白氏文集』が、校記付で句読が切られた活字本で簡便に閲読することができるようになった。本書は南宋紹興年間（一一三一—一一六二）初年板本を底本とし、明清各板本で対校したものである。ただその「出版説明」に「但举凡原本明顯の錯誤和脱漏之処、或改或補、都一一做了校記」とあるように、底本の明らかな誤脱などの箇所到校記を付して誤脱を補うのみで、底本でとりあえず読みえる文字については、他本の文字に言及することはない。この「季夫人」についてはひとつの校記も付されていない。

このようなかで『白氏文集』に初めて本格的な全注を施したのが、朱金城氏箋校『白居易集箋校』六冊（上海古籍出版

社、一九八八年）である。中国古典文学叢書の一冊として刊行された本書は、流布本の地位を持つ万曆三十四（一六〇六）年馬元調刊本を底本として、中国において刊行された十一の刊本および七の総集などと校勘を行つて本文を校定したものである。注釈（Ⅱ箋）の特色は、凡例五に「本書の箋釈盡量採用前後互証方法、并注明所徵引白氏詩文卷數、以便研究者查考」とあるように、作品間の関連を指摘することにある。こうしてそれぞれの作品の制作時期の前後などが明らかとなり、制作時期の特定、延いては制作場所、官職など白居易の作品理解に必須の要件が提示されることとなる。まさに『白居易年譜』（上海古籍出版社、一九八二年）の著者朱金城氏の面目躍如とするところである。

本書の箋校の特色を「李夫人」について見ておこう。まず【箋】においては、凡例六に言う原則通り、陳寅恪氏『元白詩箋証稿』を引証して「長恨歌」との関連を説く。次いで6「甘泉殿」、28「重璧台」、29「泰陵」と固有名についてのみ注釈を付している。史籍を引用して白詩の表現の根拠を証する体である。ここにも歴史のなかに作品を置いて読解するという、朱氏の作品に対する姿勢が表れていると言えよう。【校】においては、底本と他の刊本との異同を九箇所にわたつて注記する。なかでも注目すべきは、29「泰陵」の校勘記で、「馬本・汪本俱訛作「太陵」としたうえで、岑仲勉氏説を是として、底本を「泰陵」と校改している点である。このように本書は従来説にも細大漏らさず自配りをしたうえで、その説を取り入れており、校勘の精度は極めて高いものと言える。ただ本書において

は日本に残存する旧抄本への言及はいっさいなく、時期的な事由とはいえ遺憾と言わざるをえない。

その後中日の研究交流の隆盛を受けて、日本における白居易研究の成果をも取り入れる形で、近時の白居易研究の集成として出版されたのが、謝思煒氏『白居易詩集校注』六冊（中華書局、二〇〇六年）である。本書は詩のみの全校注であるが、引き続き同じ著者によつて、『白居易文集校注』四冊（中華書局、二〇一一）が散文篇として出版された。本書は上の顧学頴氏校点『白居易集』と同じ中国古典文学基本叢書の一冊として、紹興本を底本として刊行された。特色は大きく二点挙げられる。ひとつは校勘のさいに『箋校』が用いた中国側の資料とともに、日本側の資料を全面的に利用している点である。景印本の刊行がなされているものに限られてはいるが、神田本、金沢文庫本およびそれらを利用して作成された平岡武夫氏・今井清氏校定『白氏文集』三冊（京都大学人文科学研究所、一九七一年）などに基づいて、主要な日本残存平安鎌倉時代の旧抄本文に自配りを行っている。二点目は注釈の方法についてである。本書凡例六に、「本書注釈力求詳明、凡与白詩内容理解・詞語訓釈相關有文献典拠可証或有助参考者、均給出文献來源」とあるように、白詩の内容理解・訓釈に関わる注釈が付された。現在の日本人にとっては至極当然に思える注釈方法であるが、上に見た朱金城氏『箋校』には絶えて見えなかった注のあり方であった。謝氏は同じ凡例のなかで、「本書在編年・行蹤・交遊・時事等方面、依拠朱著尤多」と言うように、史実關係の注に関しては、多くは朱氏『箋校』を踏襲している。それ

に対して本書の特色としては「内容理解・詞語訓釈」に関わる注釈であることを言っているのである。

本書の校注の特色を「李夫人」について具体的に見ておこう。【校】については十三条にわたって諸本との異同が記される。ただ凡例五に「本書凡底本明顛訛脱衍倒而別本可拠者、拠別本校改。底本与別本異文両通者均出校」とある方針通り、底本の紹興本で意が通じるときは、他本の文字を併記するのみの措置をとっており、文字の優劣の判断は行わず、底本の文字を尊重している。この点は中国において先行する二著と態度を同じくする。典型的な例として、8「愁殺君」について、「愁殺人」神田本等抄本作「愁殺君」^⑧と注するのみで、底本本文「愁殺人」を校改することはない。この箇所などは、すでに二句目に韻字として「人」を使用しているので、古体詩であつても韻字として同字は避けるところである。よつて神田本などの「君」が優ることが比較的明らかなケースと言えよう。しかしながら謝氏「校注」は底本を尊重して校改することを避けている。

次いで【注】について見る。2「李夫人」、6「甘泉殿裏令写真」、27・28「君不見穆王三日哭、重璧台前傷盛姬」、29・30「又不見秦陵一掬淚、馬嵬路上念楊妃」などは、すでに朱氏【箋校】に見えた項で、それを踏襲しつつ増補した内容となっている。しかしながら2「李夫人」では、朱氏【箋校】においては陳氏【元白詩箋証稿】を引証して「長恨歌」との関連を説くのみであったところが、本書では「漢書」(外戚伝)の李夫人の項を摘記することで、「李夫人」中の「念未已」、「來何

遅」、「是耶非耶」、「平生貌」、「寢病」などの語が確かに史籍に基づくものであることが証されるのである。これは言うまでもなく白居易自身が「新樂府序」(三〇一七)で言う「其事覈而実、使_レ來者之伝_レ信也」とある新樂府の方法を的確に指摘し得た注となっている。また11「九華帳深夜悄悄」については、「宋書」(后妃伝)、王維「洛陽女兒行」を挙げて、「九華帳、言帳之精美」と詩語の含意を説く。このように謝氏「校注」の【注】は、従来の中国における詩の注釈とは異なる、詩の表現のあり方に注意を払った内容を含んだものであることが注目される。

三、日本における注釈について

日本における白居易の受容は早く、詩人の在世中平安時代前期に遡る。当時に遡る読解を跡づける資料は残されていないが、嘉承三(一一〇七)年書写、天永四(一一一三)年移点が奥書で知られる神田本が存する。卷三、四の新樂府二巻のみではあるが、本文の有する価値とともに、詳細に付された訓点・書入によって平安時代の博士家の学問の実態を知ることができ、貴重な本である。鎌倉時代前期十三世紀に書写校合移点された金沢文庫本が二十巻でいど残されていることも、『白氏文集』研究にとって絶好の環境である。本書の書写自体は十三世紀ではあるものの、祖本は白氏在世中の会昌四(八四四)年に遡ることできる希本である。日本僧惠萼が蘇州南禪寺において、白氏自身が開成四(八三九)年に同寺に奉納した文集を、書写し将来したものであった。神田本に比して完好の写本とは言えな

いが、なんとと言っても白氏手定の文集編集の様態を伝え、文字においても原態を留めることが多いと考えられる。残存する巻数は『白氏文集』全体の二割半くらいであることは惜しむべきであるが、その意義は測り知れない。本書も全体にわたって博士家点が付されており、平安時代の学問の実態が知られるものである。それらを受けた平安鎌倉の旧抄本・選集などいくつた存するが、次いでまとまった読解の資料として挙げうるものは、元和四（一六一八）年刊の那波道円古活字本に書き込まれた校語である。同種のもは数本存するが、なかでも東京国立博物館蔵本は林羅山・鷲峯父子が半世紀をかけて那波本に金沢文庫本の訓点を移点したものである。さらには寛永元（一六二四）

年の校書識語を持つ書陵部本校本が、近時下定雅弘氏・神鷹徳治氏編『宮内庁所蔵那波本白氏文集』（勉誠出版、二〇一二年）として出版されたことよって、簡便に金沢文庫本の逸巻の様態を窺うことができることとなった。本校本の校勘上の重要性についてはやく花房英樹氏の説くところである^⑧。その後日本において流布本の地位を得たものは、明暦三（一六五七）年、立野春節が明刊本に基づいて「菅家点本」と「別本」との訓点を付して刊行した板本で、文集全体にわたって訓点が付されている。本書は長澤規矩也氏編『和刻本漢詩集成』第九、十輯（汲古書院、一九七四年）として複製出版されている。

近代になって『白氏文集』の全注はいまだ出版されていないが、鈴木虎雄氏『白楽天詩解』（弘文堂、一九二六年）、佐久節氏訳註『白楽天詩集』四冊（国民文庫刊行会、一九二八）、一九三〇年、『白楽天全詩集』（日本図書センター、一九七八

年）として複製刊行）は注目すべき成果である。前者は「新楽府」と「秦中吟」との全訳注、後者は続国訳漢文大成の一巻として刊行されたもので、清汪立名編訂『白香山詩集』に基づいて全詩を訳している。鈴木氏『詩解』は明暦刊本、佐久氏『詩集』は汪立名本に所拠するゆえ、本文としては新味に乏しい。ただ鈴木氏『詩解』には31「艶骨」について、**【字句解】**において「艶質 うつくしき艶質、質の字を或は骨に作る^⑨」とあるので、旧抄本を参看していたことが窺える。

二者の体裁についてかんたんに触れておくと、佐久氏『詩集』は、**【字解】**として脚注に「尤物 美人なり」の体の簡略な語注、**【題義】**として白居易の題注に基づいた趣旨、最後に**【詩意】**として大意を取る。白詩全詩の翻訳の意義は高いが、研究に資するところは少ない。いっぽう鈴木氏『詩解』は、まず訓点付きの本文を掲出し、**【題意】**は佐久氏『詩集』の**【題義】**と同じく、次いで**【字句解】**は詩語の語注だが、たんに字義を釈するのみではなく、文脈に即した解釈を施す点に特長がある。たとえば15「既来」について、「以下は看る人の胸中をいふ、来とは夫人の魂が来ること」と注して、この句から武帝の心内語であることを読者に対して注意を促している点などである。最後に**【義解】**としていいいな翻訳が載る。ここでも独自の解釈が示されることがある。14「香煙引到焚香処」について、現在ふつうには夫人の魂を主語として、それが香を焚くところへ現れるとするとするところであるが、鈴木氏『詩解』では、「香の煙にみちびかれて方土が香を焚いてゐる場所までいつてみる^⑩」と、武帝を一句の主語とする理解を提示している。今日

においても見るべき見解が示されている。

戦後の白詩訳注のなかでもっとも影響力を持ったものは、

「中国詩人選集」の一冊として刊行された、高木正一氏注『白居易』上・下（岩波書店、一九五八年）であろう。上巻は新樂府五十首の全訳注、下巻はその他の「諷諭詩」、「閑適詩」、「感傷詩」、「律詩」を選択する。本文は那波本に拠るものの、要所では神田本、金沢文庫本などの旧抄本への目配りも行う。語注は鈴木氏「詩解」を踏襲するところが多い。しかし「〇縹渺人間世界から遙かにはなれたところを意識している」のような詩語の含意性を説く注が存することは本書の特長である。また「〇愁殺 殺は意味を強めるための助字」、「〇去何速兮二句（中略）兮は意味をもたぬリズムをととのえる助字」、「〇見違立ち去られる。見は受身の助字」などと、助字に対する注視が存することは特筆される。このことはこの期の日本における注釈書の特質で、後に受け継がれることとなる。

その後、白詩の選訳本は数種出版されるが、近年の成果としては、川合康三氏訳注『白楽天詩選』上・下（岩波書店、二〇一一年）がある。岩波文庫の一冊で、高木氏『選集』と同じく那波本を底本とする。本書の大きな特色は選ばれた作品を白居易の人生に沿って画期し、全体を編年で構成することである。これまでの白居易研究の成果を読みやすい形で提示したものと見えよう。体裁は本文、訓読文、現代語訳、注、補釈という標準的なもので、本文も高木氏『選集』の方針と大同である。注においても助字の機能の指摘など高木氏を受けるところが多いが、19「髻髻」など高木氏は「そっくり」とするだけであったが、

本書は「……にそっくり。よく似ている。双声の語」と詩語の声律に目を向ける。翻訳にも反映していて「翡翠色の眉はくつきりと、つねの面影を残し」と擬態語としての性格を訳出する工夫を見せる。双声語、疊韻語さらには換韻の所在を示すことなど、詩としての性格を浮かび上がらせる注となっている。

近時の日本における『白氏文集』訳注の状況を述べるにあたって、一九八八年より刊行が始まっている岡村繁氏『新釈漢文大系』（明治書院）は『白氏文集』全訳注を旨指した壮挙として触れないわけにはゆかない。現在第一巻を残すのみとなったが、今回題材としている「李夫人」がその巻に含まれているゆえ、ここでは取りあげなかった。

日本における漢詩訳注と前節で見た中国での注釈との相違点は、中国における校記の位置づけが日本においては大きく後退していることである。日本側訳注に一般書が多い点も差し引かなくてはならないが、刊行中の岡村氏『新釈』においても機会的に異同について触れる形をとる。この日本側訳注の欠を補って余りある存在が、平岡武夫氏・今井清氏校定『白氏文集』三冊（京都大学人文科学研究所、一九七二―一九七三年）である。那波本を底本として、中国の板本各本、日本の平安鎌倉の旧抄本を糾合して校勘した労作である。ただ信頼すべき校勘資料である、神田本、金沢文庫本が存する巻のみの刊行であるゆえ、二十一巻分であることは惜しまれるが、その精度は比類ない。いちいちの語について、資料の持つ価値と詩語としての文学性とを斟酌し、白氏の表現意図を推定する姿勢に、その表現がいかに熟考のうえに成っているかを教えられる。その実例は

枚挙に暇ないが、たとえば21「魂之不来兮君心苦」について、

「不来兮 兮字各本無。諷諫本・唐文粹本・樂府本亦無。今從神田本・上野本・猿投本・管見抄本。東洋文庫本有兮字而無之字」と「兮」字の必要を旧抄本群を根拠として説く。ここに「兮」字が入ると二十一句目は八字となり、次句との字数上のバランスを欠くこととなる。おそらくその配慮からか宋版以降「兮」字を省き、七字に整えられたのであろう。東洋文庫本のばあいは「兮」字の必要性は感じたが、七字に整えることへの欲求に勝てなかつた所為であらう。しかしこの両句は「魂之不来」と「魂之来」とが条件となつて、それぞれ「兮」を介して「君心苦」、「君亦悲」と結果が詠われる句構となつている。白居易はあえて七言の均整を破つて、歌謠性を挿入することで武帝の揺れ動く心情を描出する手法をとつたと考えられる。この「兮」字の有無については謝氏『校注』以下旧抄本に言及するなどの注釈書にも触れるところがない。宋版同様旧抄本の衍字としたのであろうが、京大校本はそれを見逃さず、旧抄本の文字の価値に照明をあてたのである。前節で述べたように謝氏『校注』は神田本の異文を挙げはするが、本文の価値について判断はしない。京大校本は神田本の資料的優位性のみならず、詩語としての価値を見極め判断して校定を行っているのである。

四、訓読のちから

最後に前二節での検討を踏まえて「李夫人」中の難解句について、諸注釈書の比較を通して、日本における訓読の持つ価値に言及しておく。取りあげるのは、24「安用暫来遙見為」で、

本文校定も解釈も一定していない句である。

朱氏『箋校』は「安用暫来還見違」と刊本の文字をそのまま採用し、【箋】【校】ともにない。次いで謝氏『校注』も同一本文で、【校】において「還見違」《樂府詩集》・神田本原本作「還見為」、其他抄本作「遙見為」と旧抄本の文字に触れ、【注】はない。

いっぽう日本においては、高木氏「選集」においても本文は上と同様で、「安くんぞ暫らく来たりて還た違ら見るを用いん」と訓読する。語注としては「○見違 立ち去られる。見は受け身の助字」と見えるのみである。川合氏「岩波文庫」も同様である。

その中で明確に異なつた立場をとるのが、京大校本である。「安用暫来遙見為」の本文を立て、校勘記で「遙見為 各本作還見違。諷諫本・唐文粹本同。樂府本作還見為。今從上野本・東洋文庫本・猿投本・管見抄本。神田本作還見為而校改還作遙」と根拠を示す。神田本はこの句を「安(ク)ンソ、還(ク)左、アカラサマニ」来て遙に見(ル)ことを用て為む」と訓む。この「見」字を受身の助字でなく、「みることを」(明暦刊本)、「まみゆるを」(書陵部本校本)と動詞で訓むことが博士家の伝流であつたようだ。

近代の諸注が刊本の「還見違」を採用して無理をした訓を付したのは、この一句の「安用く為」の構文を見落としていたからである。小川環樹氏『唐詩概説』の「唐詩の助字」、「もつて」の項に、「何用(なんぞもちいん)、不用(もちいず)は必要としない義」と説く。この説は釈大典『詩家推敲』(宝曆十三

（一七六三）年）を踏まえたもので、大典は「不用」の項で宋張方平「題^二徐州歌風台^一」の「安用思他猛士為^一」を拳例し、「安ぞ用いん他の猛士を思ふことを為るを」と訓じている。これは「どうして他の猛士を思ふ必要があるか」の意となる。白居易自身も同じ「新樂府」中の「司天台」（三〇一〇）で「不^レ得知、安用^三司天台高百尺^二為^一」とまったく同じ句法を用いている。この「用」字は大典も「本義ヲカロク用ユ」と言うように動詞の用いる意ではなく、助字「以」に近い意味と考えたと、大典の訓読法よりは神田本が優るように思える。以上を踏まえて現代語訳してみると、「どうして、ほんの少しの間やつて来て遠くから面会する必要などあるのか」となる。

じつはこの訳解はすでに鈴木氏『詩解』が一案として提示するところであった。「○還見違、此の三字或は遙見為に作れり、孰にても通ず。還は俗語「また」なり、見違の違は我に違ひてあちらへ去るをいふ、見は受動「らる」に当る、夫人よりいへば去るなり、武帝よりいへば去らるるなり。遙見為に從へば、遙に見ゆることを為すと訓む、遙見とは帳を隔てて遠く相見ゆるをいふ、為とは夫人が遙見といふことをなすをいふ」と『字句解』において注しておいて、『義解』において「こんなことならちよつと来てますます去るといふ必要はないではないか。（遙見為に從へば、「ちよつと来て遠くから面会するといふ様なことをする必要がどこにあるか」と訳している。鈴木氏は句構を理解せず句末の「為」を動詞と取つたため、「面会するといふ様なことをする」というもつて回つた解釈になっているが、結果としてこの解釈は正鵠を射ている。その点神田本の

「もつてせん」という助字としての訓法は、正確な意味を伝えるたものと評価しえるのである。訓読というシステムが存したこによつて、目の前に存在する一文字一文字をどう訓むかという課題が生じ、その課題を克服するためにもその文字の用法に對する思索がなされたのである。日本人が助字をゆるがせにしなかつたゆえんである。

【付記】

本稿は、筑波大学日本語日本文学会第三十八回大会パネルディスカッション（ことばの翻訳・文化の翻訳）（二〇一五年十月三日、筑波大学）における基調報告に基づいている。司会の勞をお執りいただいた長田友紀氏、他のおふたりのパネラーならびに当日討議に参加していただいた方々に謝意を表す。

【注】

- ① 顧学頤氏校点『白居易集』第一冊、中華書局、一九七九年、四頁。
- ② 朱金城氏箋校『白居易集箋校』第一冊、上海古籍出版社、一九八八年、二二頁。
- ③ 謝思煒氏『白居易詩集校注』第一冊、中華書局、二〇〇六年、六頁。同右。
- ④ 同右。
- ⑤ 同右。
- ⑥ 注③と同じ、四〇六頁。
- ⑦ 花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』朋友書店、一九七四年再版、二二四～二二六頁。
- ⑧ 鈴木虎雄氏『白楽天詩解』弘文堂、一九二六年、二二七頁。同右、二二四頁。
- ⑨ 同右。
- ⑩ 同右。
- ⑪ 高木正一氏注『白居易』上、岩波書店、一九五八年、一五五頁。同右。
- ⑫ 同右。
- ⑬ 川合康三氏訳注『白楽天詩選』上、岩波書店、二〇一一年、一九二頁。

- ⑭ 平岡武夫氏・今井清氏校定『白氏文集』第一冊、京都大学人文科学研究所、一九七一年、一〇三頁。
- ⑮ 注②と同じ、二二七頁。
- ⑯ 注⑥と同じ。
- ⑰ 注⑪と同じ。
- ⑱ 注⑭と同じ。
- ⑲ 太田次男氏・小林芳規氏『神田本白氏文集の研究』勉誠社、一九八二年、一〇九頁。
- ⑳ 小川環樹氏『唐詩概説』岩波書店、二〇〇五年再版、二九五頁。
- ㉑ 注⑧と同じ、二二五―二二六頁。

(たにぐち こうすけ 筑波大学)